昭和二十九年九月
創刊号

窯業同窓會會誌

東京工業大學
窯業同窓會

目次

一、發刊に際して……　會長　大野政吉
一、所感……　副會長　江副孫右衛門
一、所感……　副會長　浮淵武彦
一、京滋支部會……　藤岡幸二
一、發展の一路を辿る母校…副會長　山内俊吉
一、同窓會春季總會……　素木洋一
一、御禮と思い出のひとこま……　宮川愛太郎
一、昭和二十八年度本會事業報告……
一、昭和二十八年度本會會計報告……
一、同窓會規約改正と二十九年度役員
一、昭和二十九年度事業計畫について
一、名簿發行についての御願ひ……
一、ガマとカマ……　T・O生
一、學内、會員消息……
一、宮川愛太郎氏寄金について……

昭和二十九年四月十日同窓会總會に於ける大野會長の御挨拶

全上懇親会

全上總會席上に於ける宮川愛太郎氏へ記念品贈呈

同窓會會誌發刊に際して

會長　大野正吉

戦前は活發でありました窯業同窓會も戦争の為中断はしましたが、いち早く立ち直り昨今は面目をとゝのえ今まで以上の發展の徴候が現れて参りました。これはひとえに同窓各位の熱心なご協力によるものと感謝に耐えません。

今后本會の事業を文字通り發展させるには、絶えず全國の同窓各位の緊密なる連絡協調が必要で、且重要なことゝ思いまして同窓會々報を發行して各位の動勢を廣く知り、誌上總會を出来る丈澤山催しますことは親睦を圖る第一歩だと信じます。

この創刊号は拙速を旨としましたので到底ご満足の出來るものではないと思いますが、本會誌が回を重ねるに從つてその内容が堂々と充實しその効を奏します事を切望する訳であります。その時こそ窯業同窓會が名實共に斯界のリーダーとして面目を新たにすることゝ確信します。

何卒この發意が連綿として本會の發展に寄與する様同窓各位の絶大なる御好意と御後援を切にお願ひします。

この際一應本會が行つた事業を簡單にお知らせします。

1. 混亂した戰後なるべく早く同窓各位の住居を探して名簿を發行した(昭和二二年一〇月)
2. 戰後最初の總會を復活した(昭和二二年一〇月)
3. 宮川愛太郎氏勤続三三年記念祝賀會を行つた(昭和二二年一二月)
4. 熊澤次郎吉先生古稀祝賀會を行つた(昭和二四年四月)
5. 名簿を引續き發行した(昭和二四年二月)
6. 母校窯業懇談會に援助した(昭和二四年六月)
7. 故平野耕輔先生記念會に參画した
8. 明治一七年に窯業學が開講されてから七〇年に相當するのを記念して窯業關係教官及同窓會員物故者追悼會と總會及び懇親會を催した(昭和二八年五月)
9. 總會を兼ねて濱田庄司、倉田元治氏の講演會を行つた(昭和二九年四月)

尚、この總會で會則の一部改正を行い副會長を五名に増加した。即ち山内、倉田両副會長の留任と新に江副孫右衞門、浮洲武彦、久保季吉の三氏が推されたので本會の發展が一層期待される。

以上のように次第に活動が著しくなつてきましたが之れに加えるに本會誌の發刊を相圖りましてこの小冊子になつた訳であります。編輯其の他何かと不備がありましようが大方の御叱正を大いに賜りたいと思つています。

尚一一月現在で名簿を發行しますので前回發行名簿中訂正を要する個所がありましたら至急宮川氏まで御知らせ下さい。會誌も二号、三号と順次發行したいと存じますので各クラス、地方の狀勢をお知らせ下さい。

終わりに本會名簿發行毎に特にご援助を賜つた各會社及總會、懇親會を開催する毎に福引き景品を御贈與下さつた各位に厚く御禮を申し上げますと同時に今後一層のご支援をお願い申し上げます。

所感

副會長　江副孫右衛門

日本の眞の復興再建は戰前の世界的地位迄に築き上ることゝ思うが戰後の國内様相は余りにも議論が多過ぎて足が地に付かぬフラ〳〵の狀勢に見ゆる憾がある。

本統の經濟自立も国の繁榮も、亦國民の福利增進も須く各分野に亘り全国民が地に付いた確固不動の努力を續け凡ての面に於いて無限に藏する改善進歩を如實に顕現することに依らば可能である。

技術者に特に率先垂範して其の先達となりたいものである。

學内消息

① 山田久夫氏(鉱物學教授助教授)は學位論文「千厩接觸變成岩の岩石學的研究」を東京大學に提出中のところ去る昭和二十九年二月三日附で理學博士の學位を授與された。

所感

副會長　浮洲武彦

窯業同窓會が生まれたのはいつの頃だろうか。明治十九年に第一回の卒業生が出た頃に出發した事にするのが、眞実かもしれないが、これは矢張りその頃に發足した窯業協會と一体ではなかつたろうかなどとあまり根據の無い想像をしてみる。私が本會を知つたのは、大正の始めと思うが當時は良く地方から上京された先輩や同窓などを迎えて鳥屋などで會合が開かれた事を記憶している。(その頃鳥又會などと稱した様の氣もする)左様に此の會の歴史は母校の窯業科と共に古く輝かしいものではあるが、會員の構成から見ると恰も蔵前工業會と窯業協會との間に挾まれた如き存在である為自ら會の目的も両者と異なるものであるは當然であるが其れ丈けに活動の範囲は狭く仕事はやり難いとも云えるが、又地方から見ればほんとうに内輪同志の近親感を以て拘束されない規約の下で大先輩も新卒者も此會を通して心からの親善を結び會員相互間の協力の実を擧げる事が可能であると云えよう。本會の一層の發展を祈る次第である。

同窓會だより(京都滋賀)

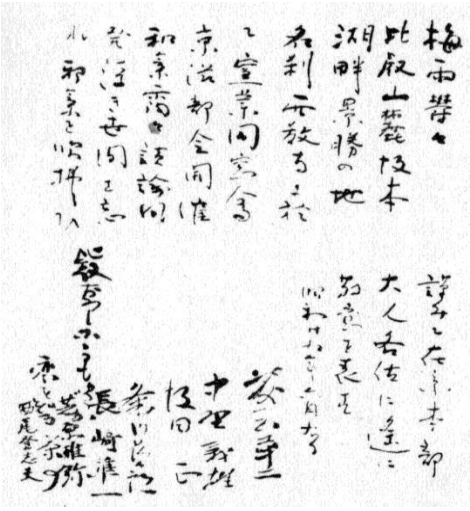
(別名、みゝず講)

藤岡幸二

昭和二十九年六月十九日午後一時滋賀縣大津市石山驛に、集合せよとのこと、この日朝からの雨しきりに降り一刻も止まず果たして集まりはどうかなと案じつ、京都驛で辻君と一緒になつて

石山驛に向ふ、石山驛には信樂からはせ參じた中野、西尾兩君と丹波の山奥から遠路をことゝもせず參加の芝原君が待つて居つてくれて、土砂降の雨の中を日本電氣硝子會社に向かふ、湖畔の景色も目に入らず近い道も可なり遠く思いながら會社の正門に刺を通じて粂川君に迎へられる、やれ〳〵と休むまもなく工場一巡。

當日の寄書



工場は昔ながらの人工吹きのパイプ作業と最新式のダンナー式チューブ製形の二本立で盛に時代の寵兒螢光燈の硝子チューブを作つて居る、更に坩堝の製作なども見せてもらつて、隣の姉妹會社新日本電氣會社の電球や眞空管の製造工程を案内されたが、これはたゞ感心するばかりでチンプンカンプンわからない。一巡して休憩室に入れば小島幸三郎先生に會う。寄寓なり雨の中をご苦勞さんと挨拶を交して、粂川君の案内で京阪電車の停留場へ、それから坂本、と運ばれる、雨の爲車中の展望は全く駄目で中野君としきりに白川夜舟を漕ぐ。

坂本につく四時頃なり雨中を十町位歩かされて西教寺と云う豪壯なお寺につくこゝが今日の懇親會場なり、西教寺は比叡山延暦寺の別格本山とも云うべき由緒ある名刹、天気よければ境内から建造物、寶物なども見學すべきなれど、雨にたゝかれてたどり着いた一行はそれよりも先づ一杯と直ちに書院造りの庫裏の一室で名物天台精進料理の高膳で宴會とする、こゝへは京都から直接走せ參じた坂田君とあとを追ふてかけつけられた長崎君を交えて愉快な談笑の一席が展開された。朱塗りの碗皿に盛りつけられた豊富な精進料理と松竹梅の銘酒で席ははづむ〳〵。最初は寺の僧さんが運ぶ料理や徳利であつたがいつの間にか女學生風洋装の有髪の僧(?)のお給仕に交じつて居たのもうれしかつた。興はつきぬが歸りは遠し。雨の暗闇ではと名残をおしみつ引き挙げたのは九時頃であつたろうか、當日の出席者は次の通り（数字は卒業年次）

藤岡　幸　二(明三八)
中野　義　雄(大一〇)
粂川　長次郎(大一二)
坂田　正(大一四)
辻　晋　六(昭六)
長崎　準　一(昭一四)
西尾　登志雄(昭一八)
芝原　雅　彌(昭二三)

の八名で欠席者は十六名であつた。この会は今年第二回目で第一回は二月六日平安寮のすきやき会であつた。

尚今回の懇親會、見學会の全般にわたつて粂川君の絶大な御盡力があつたことを銘記して置きます。

發展の一路を辿る母校

副會長　山内俊吉

終戰後同窓會の開催は私の樂しみの大きなものゝ一つであります。名簿もほゞ完成し同窓生の動向も殆んど明らかになりましたが尚おいくらかの不明な會員がおりますので御存じの方は御知らせ下さいますれば幸に存じます。目下産業界は非常な困難な狀況下にあり、會員の方も一入の御辛勞と御察しいたしますが日本経濟再建の完遂の爲に今一息の御健闘を御願いいたしてやみません。

母校最近の發展の姿は入学率十九人に一人のはげしさをもつても想像されますが遂年その譽を落さぬ様努力が拂はれています。本年度の特筆すべき事柄はその内容充實の一端として從来の工学部を改め理學にも重点をおき将来は工學士、工学修士、工學博士の他に理学士、理學修士、理学博士をも出せる態勢をとる事を決意し文部省に申請した事であり、又他の一つは皆さんのご支援による七十周年記念事業が予定を突破し五千萬円以上の募金事業を完了し既に先般体育館四五〇坪が本館北側に建てられ一偉容を示し更に約三〇〇坪の近代設計になる大講堂が本館玄關前スロープ手島先生銅像前にその敷地が選定され九月六日地鎮祭を了し来年八月中には完了の予定であります。之等の仕事に關係した私はこの盛況が全く卒業生の實力のあらわれであることを痛感いたしている次第であります。

内外共に着々充実しつつある母校において窯業關係の職員も一同元氣で教育並びに研究に全力を擧げて参りますのでこの上とも御鞭撻下さいます様お願い致します。

昭和二十九年度同窓會春季總會

素木洋一

大野會長、山内、倉田、兩副會長その他全国から馳せ參した古老・新人合わせて百名を超える恒例の窯業同窓會は櫻もようやく色あせ初めた四月十日東京工業大學第一會議室で例年に見られぬ充実した式典で繰りひろげられた。

本年は丁度宮川愛太郎氏の在職四十年に當り、而も還歴祝という二重のおめでたとあつて、その業蹟と功勞に對し同窓會員の心からなる祝辞と記念品の贈呈式を行い、一般業務報告、役員改選など事務的事項を討議、選擧の結果、會長。副會長の留任を満場一致可決した。新しく選出された大野會長の挨拶があり、事務的な式を終了した。

前々からへ同窓會各位の要望もあり、新計画の講演會を思い切つて開くことにしたが、本年は幸運にも陶藝家濱田庄司氏と旭硝子株式會社倉田常務が講演を快諾されたので、おいそがしい中を約一時間宛濱田氏の「歐米の陶藝家」、倉田氏の「東亜雑感」を拜聰することができた。この日は會員の他一般聽講者も多數おしかけ、特に濱田氏のスライドによる陶器の説明や倉田氏のタイ国民の對外感情についての観察には内田本學長もやゝ緊張された面持ちであつた。講演がおわつて、三々五々「やあ」「やあ」の会話で食堂に集合、ビールの乾杯と同時に宮川氏の赤チョツキ姿が拍手で迎えられ、文化賞受賞者の板谷波山氏、藝術賞を受けられた濱田庄司氏、各務鑛三氏の祝詞はビールの泡の中で披露された。春宵は正にテーブルスピーチには不向きでとばかり歌が出たり雑音がでたり、老若すべて昔に返り大小さま〴〵な景品の福引があり、窯業同窓會の万歳に、工業大學万歳、ものたらぬ若人を殘して八時盛會裏に終了した。

學内消息

② 森谷太郎教授は去る五月十七日羽田を出發してスエーデンのベツクスジオエ（Bäxjö）に於て開催された國際ガラス會議に出席されて去る七月一五日無事歸國された。

御禮と思ひ出のひとこま

宮川愛太郎

有離う御座います。

私は皆様のあたゝかい包容によつて、大正三年に本學の前身東京高等工業學校窯業科職工として採用して頂いてから滿四十年になり還暦を迎えることが出來ました。

然し愚鈍の上に學歴皆無の私は單に窯業工場の番人で終始なんらなす所なく今日に至つたことはまことに恥しい次第ですが、一應大過なく勤めさせて頂いたことは永い間ご指導と御援助をして頂いた同窓の皆様及蔵前高工時代から今日に至る窯業關係教官及職員各位の御陰によるもので心から感謝致しております。有り難う御座いました。

去る四月十日に總會と懇親會が催された節私の還歴を祝して赤いチョツキと勤続四十年に對して記念品を贈つて頂きました皆様の御懇情まことに有り難く厚く御禮申上ます。

私が職工として採用された當時の窯業科長は平野耕輔先生で工場長が芝田理八先生、近藤清治先は分析室で研究しておられた。

最初出勤したのが大正三年五月二十八日であつたが創立記念祭準備の眞最中で面くらつた。平素なら二十六日が記念日だから終つているのだがこの年は昭憲皇太后陛下が薨去されたので六月二日三日に延期されたとのことであつた。窯業を全く知らない私は數日間の記念祭準備のうずに巻き込まれ二日間の校内開放の人手に面喰らつた姿をご想像下さい。

私の初給は日給五十錢であつたが當時巡査の初任給は月給十二円だと芝川先生からきかされた。辨當屋で食事すると朝食が六錢で晝食と夕食が各七錢であつた。翌年間を借りて自炊したが白米が一円で六升五合で間代其他を含めて月八円位で足りたので生活は楽であつた。

勤めてから約七年間は窯焚をやらされたが最初は窯焚の指導者がいないのでその年の八月中を當時越中島にあつた工業試驗所の第三部で窯焚の練習をして磁器の焼き方を大体會得した。當時の第三部長は北村彌一郎氏であつた。

蔵前での窯業科は隅田川の川岸にあつた。毎朝八時に機械科と紡織科の汽笛が元氣に鳴ると仕事が始まる。

尤も川岸の窯場は北側に昔米舟が入つたと云はれる入江があり隅田川からの入口に水門があつてそれに老松が配されている所など中々乙な取合せであつた。仕事に疲れた時の一時を水に浮かぶカモメや、夫婦して櫓を操つる荷舟や煙を輪に吹き乍ら過ぎて行く気船等々を見たり川向こうの本所辺から國技館方面を眺めているとそれは活力を回復してくれる活画であつた。

水門に水鏡と云う姿勢の老松に明月を配した、そして岐阜提灯に火を入れた屋形舟や荷舟が櫓音も緩やかに銀波の中を進むパノラマの様な眺めも窯焚の夜には幾度か慰めてくれた江戸情緒

豊かな場面であつた。

春の隅田川は潮干狩の舟、花見舟などが滿鑑飾に鳴物入で通るので賑かである。尤も賑かと云えば有名な川開きがある。窯場のうらの棚に棧敷をつくり玉屋、鍵屋と上る花火を見物したのも思出の一つであるし、又一人淋しくドラフトの音をきき乍らの火色を覗く夜、町は眠り川向こうに聞こえた火の番の柏子木も遠くなつた頃隣りの明治病院から重患のうめきをかすかに聞く時は何となく体が固くなり水門の老松や、川面が總てうす気味悪いものとなつて二時間に一回巡廻してくる守衛の來るのが待遠しい思いをしたこともある。三年生諸君と徹夜で円窯を焚く実習の夜は賑やかであつた。

勤務當初若き日の思出のひとこまから！皆様の御健勝をお祈り申上ます。

昭和年二十八年度本會事業報告

（自 昭和廿八年四月　至 昭和廿九年三月）

東京工業大學の前身東京職工學校が明治十七年に獨逸人ワゲネル博士に依て窯業工學の講義が創められてから昭和廿八年は丁度七十年に相當するので之を記念する為若葉薫る五月二十三日(土)に数々の催しを盛大に行つた。

一、窯業關係教官及び同窓會員物故者追悼會

當日午前十時より東京都港区芝愛宕町の青松寺に於いて大野會長施主となり會員多数列席の下追悼會を執行し教官物故者二十九名並びに同窓物故者二百名（當日まで判明のもの）の生前のご功績を感謝し慎んでご冥福を御祈りした。

一、恩師物故者の追悼懇談會

追悼會が終わつてから倉田副會長が司會となり主な恩師の追憶懇話會を下記の如く催した。ワグネル博士中澤岩太博士（大野正吉氏）植田豊橘博士、細木松太郎博士（渡辺明氏）高山英太郎博士（熊澤治郎吉氏「テープレコード」）平野耕輔翁（江副孫右衛門氏）近藤清治博士（山内俊吉氏）田端耕造博士（森谷太郎氏）右の追憶談が夫々行われるにつれ、諸先生ご生前の追憶を新たにし、窯業工學の開講以来七十年の歴史に遺されたる偉大なご功績を讃えその深甚な徳を慕い一同一入感激の中にこの催しを閉じた。

一、總會と懇親會

同日午後五時から藏前工業會館五階の大広間に於て總會を開き會計報告及び其の他を滿場一致可決した。次に大懇親會に移り大野會長の挨拶に次いで藤岡幸二氏より窯業七十周年の回顧談あり。又工業大學安藤教務部長、藏前工業界金子常務理事より夫々懇な御挨拶が有り、其の他多数の會員のユーモア溢れるテーブルスピーチが続出した。

特に當日は地方からの参加者も多く、明治、大正より昭和に至る年代の會員約九十余名が一党に會し盃を重ね歡を交えた。吉例により各方面より贈られた景品で福引に興を添え盛會裡に午後八時万歳を三唱して散會した。

幹事會

昭和二十九年二月五日　藏前工業會館に於て開催した。四月十日になる予定の同窓會、總會、懇親會につき相談した。

以上の通り報告します。

昭和廿九年四月十日　（素木、毛利）

昭和二十八年度本會會計報告

會計幹事

窯業同窓會收支決報告書（自昭和廿八年四月一日 至昭和廿九年三月三十一日）

收入の部		
内譯		
前年度繰越金		八九、八五一円
預金利子		九〇円
寄附金（二四名）		二六一
懇親會會費（八五名）		四七、〇〇〇
		四二、五〇〇
支出の部		八三、二七五円
内譯		
通信費		一七、五八一円
會議費		六、八〇五
追悼會		一〇、〇〇〇
懇親會室料		（青松寺御布施）
懇親會飲食費		一、五五五
写眞撮影		四一、五一二
テープレコード代		一、一一二
印刷費		一、〇〇〇
雑支出		一、七六〇
		二、三二〇
差引殘商		六、五七六
残高内譯		
預金	九七円	
振替	二、一二八	
為替	二、〇〇二	
現金	二、三五一	

以上の通り報告いたします。

同窓會規約改正と役員選出について

一、昭和二十九年四月十日の本會總會に於いて本會の規約の一部を改正し滿場一致でこれを承認した。

一、副會長二名を五名とする事。

之れに伴ひ前會長、副會長二名は留任とし新たに三氏を推選し之を承認した。

一、本年度幹事は次の通り推選し承認した。尚常任幹事は學内幹事の互選によつて次の四君を選出した。

會長　大野政吉　副會長　山内俊吉　食田元治

（留任）江副孫右術門　浮洲武彦　久保季吉（新任）

幹事　井深捨吉　笹井熊之助　藤岡幸二　金島茂太　堅田欽次　一條茂喜司　小林作平　龜啓三郎　石川久羅四郎　永井定次郎　小原甚八　青木俊郎　井上英吉　梅原政次郎　大塚喜藏　大村關知　中島烈一　各務鎮三　中根俊雄　華房嘉勝　原幾久　村瀬六郎　鈴木保雄　北川信吉　村上三五朗　伊藤亮　鈴木巳代三　石井喬　飯塚誠厚　臼井芳一　中野義雄　高槁久雄　石塚正　粂川長次郎　山口靜逸　若林滋　北村喜太郎　吉井豊藏丸　稲生嫌次　江副勇馬　坂田正　松屋義人　水地滿穂　伊奈辰次郎　原田親信　井出善弥　横瀬信次　大石信男　川畑健雄　後藤一夫　佐藤實　野口長次　長崎勧　辻晋六　茂木今朝吉　磯部純一　森谷太郎　鈴木信一　國吉五六　村松庄治　島谷政次　小林保　速水多根雄　稲村泰　遠藤敏夫　新庄重生　伊藤正三　佐々木茂弐　笹沼宗一郎　田賀井秀夫　藤田庸助　福井哲　大河原晋　素木洋一　田上嘉秋　楠井堅三　白川清　佐治圭三　金森降　境野照雄　毛利純一　田端精一　奥田進　加藤欽一郎　清水尚　藤井豊男　近藤連一　松本三則　梅田夏雄　小出儀治　伊藤善高　鈴木弘茂　太田千里　田中淳一　岩永窯三　長谷川泰　濱野健也　牧村信之　佐藤恒夫　藤村宗平　杉浦孝三　島田信郎　亀井四郎　井瀬傳治　字田川重和　坂野義郎　堀江勲　古丸勇

専門部：日下部中治　山下透　技：福堂勇夫　増本秀敏　澤田正吾　大西常友　上瀧友之　平野英久　野口武雄　松村清　小島宏　山内祐次　田口重郎　草場知喜　學内幹事：河嶋千尋　清浦雷作　山田久夫　川久保正一郎　岩井津一　吉田博　佐多敏之　齊藤進六　村田順弘　青島清二　宮川愛太郎

常任幹事

庶務幹事　＝田賀井秀夫　太田千里

會計幹事　＝境野照維　伊藤善高

學内消息

③ 戰後絶えていた卒業見學旅行を復活して本年度は去る七月五日から一週間村田順弘氏引卒の下に學生七名と關西、北陸地方の十余工場を見學した。

昭和二十九年度本會事業計画について

庶務幹事

本年度第一回役員會を會長、副會長、新任幹事十一名出席の下に六月三十二日藏前工業會館に於いて開催し本年度事業計画につき種々懇談の結果左記の通り決定した。會員各位の絶大なる御援助を御願ひします。

一、名簿の発行

十一月現在で発行すべく準備中

一、會誌の發行

第二号、第三号と順次發行予定ですが第二号は新年号とし十二月中旬に刷上げて発送したいと思いますからクラスや地方の近況其他の原稿を御送り下さい（十一月二十日迄）

一、今秋又は來春には同窓會の集りを大阪か名古屋で開きたい希望がありますから御關係方面で研究して頂き御連絡を願いたいと存じます。

一、本會事業資金として甚が恐縮に存じますが應分の御寄附を御願い申上ます。勝手ながら左記の様な案をつくりました。

一、明治年間卒業　百円以上

二、大正年間卒業　参百円以上

三、昭和戦前卒業　弐百円以上

四、昭和戦後卒業　百円以上

尚御送金は現金を通常封書郵便に同封して頂くのが便利です。

一、宮川愛太郎氏の還歴と勤績四十年を祝する記念品贈呈の募金中です、宣敷御願いします

學内消息

④ 池の上典氏（黒崎窯業株式會社取締役研究部長）はかねて「フォルステライトの耐熱性に關する研究」と題する學位論文を本學に呈出中であつたが去る八月十日工學博士の學位を授與された。

學内消息

⑤ 吉井豊彦丸氏（秩父セメント株式會社取締役

研究部長）はパリで開かれる國際ダム會議に出席のため八月十四日スカンヂナビヤ機で羽田を出發二ケ月間に亘り歐洲のセメント工業を視察される予定である。尚本學建築學科の加藤助教授もヨーロッパへ行かれるので道づれだつた

名簿發行に就てお願い

宮川愛太郎

窯業同窓會は既に發行した名簿の巻頭に記してある様に歴史は古いが範圍は在京同窓を中心に親睦を主としてきたのを昭和二十二年に全國的の組織とし同年十月現在で全会員の名簿を発行し次で昭和二十四年、昭和二十六年、昭和二十七年と順次内容を改め乍ら発行し本年も十一月現在で発行すべく目下準備中です。同じ學窓で然も窯業と云う専門の學業を終えられて夫々業界、學會等に御活躍の先輩であり後輩である皆様が常に連絡して教え、教えられることは日本の窯業界をよりよくする爲に極めて大きな力となります。本會の名簿發行がその仲人をしてくれることを信じ大い御期待しております。名簿發行に一般の御協力と援助を御願いする次第です。

就ては前回発行（昭和二十七年七月現在）後訂正を要する以下の事項がありましたなら是非ハガキ一枚御奮発の上御知らせ下さる様御願い申上げます。

一、御住所や勤務先など御移動の場合
一、勤務先や事業場の名稱又は会員の御氏名や電話と局番、番号など變つた場合
一、新たに市制がしかれた所は新住所名を御知らせ下さい
一、其他前回發行名簿中訂正を要する個所があつた場合

以下の方々は住所不明に付き氣付の方がありましたなら御手數乍ら御知らせ下さい。（但し外國人を除く）

松本兼吉（明二九）　栗城信吾（明三〇）　川副道夫　鮫島齊示　高木清治郎　安田乙吉（明三一）　梶山由之　中川虎太郎　長良敏郎（明三二）　山下祥輔（明三三）　金森玄八（明三四）　須藤五郎吉（明三九）　村岡敏藏（明四〇）　上野繼治　髙橋清吉　中野篁之輔　山内良太郎（明四一）　戸澤有徳　根上幸作（明四四）　田名部道雄　吉澤篤二郎（明四五）　吉田熊太郎（大二）　清水玄平　森山降密　相馬俊一　園田義夫（大三）　島村正雄　宗啓秀　山田千熊　西尾榮吉　吉田剛三郎　若山旭虎（大四）　木村一男　野澤勝二（六五）　吉田九郎（大六）　大橋武夫　星野光治（大七）　星野効三　松尾章男（大八）　鬼澤武治　別府太郎　山本義一（大九）　澤田宗雄（大一〇）　岡本權次郎　木島昇　成合常徳（大一一）　山澤逸雄（大一二）　榊原康芳　禮岡正春（大一三）　牛尾又三（大一四）　山本武夫（大一五）　谷巖　松田與七　野村秀雄（昭二）　倉持順（昭三）　池田四郎（昭四）　松島貞雄（昭六）　市村定治　瀧澤一夫（昭一六）　岩宮勇（昭一九）　浦清次（昭二一）　田中淳一（昭二二）　薄井源太郎（昭二四）　野口浩（專昭二三）　中根勝（昭一六技）　大島治正　小田稔　近藤久敏　武田時雄　氷井五郎　堀井潔　米持晃夫（昭一七技）　草加大　中村藤一郎　三中榮次郎　山田正樹（昭一八技）　井下明　齋藤信　吉田徳三郎（昭二〇技）　池田道四郎　淺野克信　市原康民　市原行雄　神尾昭二　木造廣人　木村斌　小西茂　佐藤和夫　洒井務　宮輝郎　園部昭二　田中孝　濱田幸藏　藤井誠　松岡哲弘　山崎昭巳　安富清三　吉田滋

前回發行名簿（昭和二十七年十一月現在）以後死去されたことが判明した會員の方々は以下の通りです。御冥福を御祈り申上ます。

大澤猛熊（明三四）　綾部繁（明三八）　村瀬二郎麿（明三九）　塚田政男（明四二）　小關時慶（明四三）　木村小二郎（大五）　上木正二（大一〇）　吉岡文雄　伊勢龍二郎（昭二）　石坂賢二　慶野直基（昭四）　吉川高市（昭六）　塩尻清（昭一六）　松岡伸（昭二五）

ガマ（蟇、蝦）とカマ（窯）

梅雨から夏にかけて窯焚き（登窯、二昔前のお話）を手傳つていて最夜中に窯の火のあかりが届かなくなる夜の「とぼり」の幕との丁度境目頃で涼もうとすると土色の大イボのある大ガマのむれ（！）が四足をふんまへてこちらを睨んで（？）いるのに思わず寒む氣を催すことがたび〳〵あつた。

私は小學四、五年生頃だつたか講談本に讀みふけつて親父に焚書の刑にあつたことがありそのときは友人から借りていた數冊もあつてその返却に大弱りしたことがあるがその講談本の表紙に忍術使いが大蟇の上にのつかつて十字を切りガマからは白煙の立ちのぼる錦繪を思い出しガマとカマをもぢつて蟇の一面ユーモラスな顔（？）とガランとした何の変哲もない土褐色に光つた空窯とのコントラストを考えて一寸面白いなと思つたことがある。

十數年前であるが或る時ガマは捕えてどんなに厳重にしておいても必ず消え失せるということ

からそんな馬鹿な事があるもんかと言い争つて、それではと或る夜大きいのを一つふん捕えてお米を洗う直徑五十糎位の大竹籠の中に入れ上から風呂敷をかむせてその上に大石を一つのつけて二重窓の中においた。

さて翌朝早速みるのは一寸ためらつて朝食をすませてから悠々(?)と竹籠をそつと開けて見たらこわ不思儀、ガマはコツ然として消えうせている。瞬間なんだか一條の煙がすーつと立のちぼつた様な気がしていさゝか毒氣にあてられて数日間部屋の中を気味悪くすごしたが反面自分が一寸蟇公に近づいた様な氣もしないでもなかつた。その後もう一邊やつて見たいと思つたが枕もとにガマのお告げを恐れてさすが手が出せなかつた。

そんなことからカマへん(窯變)とガマへん(蟇變)をもぢつて(?)十数人と「ガマ會」なる酒變の會をつくつて蟇仙を氣取つたことがある。神秘的な蟇の生態は窯を神聖視する私達に一脈通ずるものがある。Sという或る友人が骨灰磁器を造るのに牛の骨を窯一杯につめて焙燒(?)する時に夜中洩れる青い火と一種異様な臭氣にリツ然として言い様のない重苦しい氣持だつたという昔話に私自身が一瞬言葉がつまつた事など数千年前から「やきもの」窯の神秘性はつくられたのかも知れない(未稿)

宮川愛太郎氏還歴祝並に四十年勤続記念品贈呈寄附金募集について

仝氏は今更申すまでもありませんが誠實一路母校と共に四十年を過され今年還歴の歴を重ねられた、そして本會の種々の雑務を引受られ特に名簿發行についても仝氏の刻銘な一筆々々が結實したものでありましょう。

この勞と人生の祝を重ねられた仝氏にいささかの記念品を贈呈したいと思いまして有志の方に寄附を願つて居ります。

現在までの御寄贈者は左記の通りでありますが尚大方の御賛同を得たいと念願して居りますので此の際是非多少なりとも御送金被下る様御願ひ申上ます。

一、一口金百円　(乞容赦敬稱略順不同)
一、二十口　大野政吉　山内俊吉　倉田元治
一、拾口　石井喬　濱田庄司　各務鑛三　笹沼宗一郎　末野梯六　横瀬信次　加藤左織　江副勇馬　櫻川貞雄　眞保義郎　伊藤亮　礪部純一　樋口松之助　木船要太郎　北川信吉　松崎錠三
一、五口　黒田泰造　村松庄司　高井三郎　島岡達三　倉田貢　福井哲　鈴木巳代三　木下未太郎　井上英吉　赤塚幹也　寺崎厚治　稲村泰　後藤一夫　藤井正雄　原幾久　野口長次　鈴木保雄　菅原敏夫　名和二郎　吉田寛一郎　中山一郎　鈴木信一　飯塚誠厚　田口幹太郎　松本勝喜　佐藤實　西田一雄　宇野達路　遠藤敏夫　岩切一良　尾野勇雄　江藤哲夫　山室忠臣
一、參口　小野田勝男　浮淵武彦　前澤秀憲　市原椹治　吉浦整太郎　安藝靜一　水池滿穂　橘田多里　上木正二　藤井稔　愛甲昇　山本孝彰　佐々木元一　中村義夫　伊藤幸人　大宅昇　近藤連一　山田精吾　森井良三　關口淳田村忠臣　塩田政利
一、貳口　白石清梧　西尾義雅　淺見進一　久冨豊美　飯塚帶太郎　淺野正和　齊藤三二一日野新也　金丸豊之助　河原田次剛　山本次郎　古賀義根　川浪重年　佐多敏之　松本秀夫　河井信雄　三浦正二　開田丈夫　菊地央　深田義　上野三郎　佐澤光雄　新庄重生　吉田格　北村友太郎　野上敏一　江口愛二　池田卯一　小松原將　保野福太郎　金島茂太　加藤欽一郎　吉武素水　折本賜　松本三則　上山節　加藤春美　伊藤豊成　吉村滿雄　管沼武彦　島珪次　中村能人　日笠泰行　御代健次郎
一、壹口　佐藤恒夫　本宮泉　松本哲雄　伊藤善高　中野義雄　西尾登志夫　安竹了和　山形安一　藤岡了　中澤三知彦　鷹木清　杉浦正敏　黒田永二　内藤隆三　新居善三郎　奥田博　磯村正弘　田端精一　藤井重信　福浦雄飛　各務芳樹　峯岸進　友田正雄　森川鐵之助　加唐英一　増田稔　伊藤彰　加藤竹藏梅田夏雄　奥田進　丸茂博正　濱野健也　上西義介　五十嵐才吉　山本準之助　升水政幸森元邦　小野澤啓介　中根定夫　結城一男大槻彰一　長岡一雄　牧村信之　荻島達男

以上合計　壹百六拾貳名
合計金額　五萬八千壹百円也

「圖説日本の古陶磁」發行に於て御願い

故平野先生記念事業の一部として奥田、小山、林屋の三氏の盡力により「圖説・日本の古陶磁」を出版することになりました。

故平野耕輔先生は明治二十四年に現東京工大の前身東京職工學校陶器玻璃工科を卒業され引きつゞいて母校に留まりワグネル先生に師事し

後窯業科長となり次で南滿洲鉄道窯業試驗工場や商工省陶磁器試驗所長を歴任され昭和十二年退官、昭和十五年に計らずも近藤清治教授の急逝にあい窯業科常任となり昭和十八年窯業研究所が創設されるや所長となりました。昭和二十二年四月十日七十七歳の長壽を全うされ御逝去されました。この五十余年に亘り先生が陶業界につくされた御功績を記念する爲、知友後進相寄り昭和二十三年に故平野耕輔先生記念會が組織され第一の事業として平野コレクションの整備に重點をおきましたが募金が計画通りに集まらなかつた爲資金のゆるす範囲で記念出版を計画し、最初に先生が生前古陶磁に興味をもたれておりましたので先生の舊知奥田誠一先生に出版計画を御願いし完成したのが「圖説古陶磁」であります。

次で「窯業技術史」及〔窯業工學〕を出版する豫定でありますが資金に乏しい為是非皆様に〔圖説・日本の古陶磁〕を買つて頂き次の出版が出來ます様御援助を願いたいと存じます。

故平野耕輔先生記念會長　大野政吉
同　記念出版會長　山内俊吉

編集後記

一、去る六月三十日の本年度第一回幹事會で大野會長の強い要望がありまして本會誌の刊行を企画しまして七月一杯に拙速主義でやろうということにしたわけですが何しろ編集子は初めてだし原稿はないし學内は七月末から夏期休暇となつてつい一ヶ月余を無にしたわけです。

出来上つたものはどう見ても編集子の無能さを思わせるのですが次号からは各位の絶大なる御支援を頼んで立派にして行き度いと思います。

一、論説、研究、随筆、歌詩、ニュースどんなに短かくても結構ですから御投稿を御願いします。

長文ものは一回千字―二千字程度として分載出來る様御配慮下さい。

一、母校が大學になつてから既に二十五年になりますが、山内、河島両先生も既に二十五年間大岡山の住人だつたことになります。何か記念事業をと思つていますが、御名案がありましたら御教示を御願いします。

昭和廿九年九月二十日印刷
昭和廿九年九月二十五日發行
東京都目黒区大岡山一番地
東京工業大學窯業研究所内
編集兼発行人　田賀井秀夫
東京都目黒区大岡一番地
東京工業大學窯業研究所内
発行所　窯業同窓會
振替東京一九六八五五番
印刷人　東京都大田区調布大塚七八三　森達三
印刷所　〃　森印刷所